斉藤ノブヒロ　短編集

斉藤ノブヒロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

斉藤ノブヒロ　短編集

【Ｎコード】

Ｎ１１６４Ｍ

【作者名】

斉藤ノブヒロ

【あらすじ】

作者の思い浮かんだ短編作品のあれこれをまとめてみました。過去に書いた作品も中には含まれます。

現代版　八郎（前書き）

簡単なあらすじ、
秋田の国ではない八郎の物語？

現代版　八郎

今となっては現在
その町はマンションの建ち並ぶ住宅街だが
とても片田舎である

所々に畑や田園風景がよく目立つ
そこに誰をも見下ろすほどの大きな男がいた

周りには小さい者ばかりで
その男は皆よりも大きく見える

形相は鬼のように鋭く
体格は山のように大きい
見た目は怖そうに見えるが
心は空気のように澄んでいる

幼き子　その男と仲良くしたいと思う
しかし　親がそれを許さない
男も同じ
幼き子と仲良くしたいが
その子の親が反発する

それ故　男の周りに人はなく
男は一人だった
外見がこうだからという理由も一理ある

そんなある日
町に大雨が降った
雷も絶え間なく鳴る

町の車も滑り
中にはひっくり返るものもあった
畑や田の近くにある川は浅すぎて
川から溢れ出た水はいとも簡単に作物を呑み込むだろう
民はせき止めようにも
重なってしまう恐れのある災害が怖くて
家(うち)から出られないでいた

その時であった

男は走った

誰に頼まれたわけでもなく
誰が望んだわけでもない
みんなの大事な田畑を
こんな容易く崩されてしまっては困る
男は家にある余ったものをかき集め川に囲いを造ろうとした
溢れ出てしまう前に
男は大雨や雷の中
その手を止めようともせず造り続けた

やがて雨は止み
空は陽射しが射すほど晴れ上がった
民　田畑を気にして駆け寄る
そこには綺麗とはいえないが

川の水をせき止めるには十分の囲いがされていた
その端には男が力尽きて倒れている
民は気付いた
この男がすべてやってくれたのだと

男は後々土に埋められ
善良な男と称されて
回りには花が植えられていった

太陽が沈む時（前書き）

簡単なあらすじ、
いつも通りの大きな道を歩いていると空に向かって指をさす人を見かけた。　男はそれに気付いたがなぜ周りの人々は反応しないのだろう。

太陽が沈む時

それは、いつもと変わらないある晴天の日の出来事だった。
俺はいつも通りにその道を通りかかった。そこで変わった行動をした人を見つけた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。

その人は何も言わず、ただ空に向かって指をさしているだけだった。
まるで指をさす方向に何かがあるとでも言いたそうな感じだ。
こんな変わった行動をしているにもかかわらず、周りの通行人は通り過ぎていく。一瞬だけでも指をさす方向を見ればいいのに全く見向きもしない。
俺だって変だと思った、何度見ても空はいつもと変わらない。その人のやっている行動が何を意味するのか分からなかった。

また別の日、空に指をさす人を見かけなくなってだいたい1週間は経っただろう。再びその道を通りかかった。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。

またしても空に指をさす人を見かけた、今度は2人になっていた。
言葉で伝えるわけでもなく、表情一つなしで指をさす。
さすがに気付く人がいてもおかしくはないはずだ。それなのに通行人はただ通り過ぎていく。
確かに忙しすぎて自分の事に一生懸命で周りなんか気にしてられない。そんな考えを持つことが別に悪い訳ではない。
俺だってこの人たちが何故こんなことをしているのか分からない。
俺もだんだん自分の中で、軽くうつ状態を起こしてしまいそうな気

分に追いやられた。

また別の日、今度その人たちを見かけたのは約3週間後。また2人で空に向かって指さしていた。この前は人数が増えたのに今回は2人のままだった。

通りかかった通行人も、いつも通りに通り過ぎていく。

「・・・・!?」

俺は空の異変に気付いた。まるで日の玉のような遠くてまだ小さいが大きなものがどんどん迫ってくるのが見えた。

「あっっ!!」

俺もそれに気付き指をさした。周りの通行人もそれにつられて指をさす方向を見上げた。

（隕石が落ちてきたような大きな音がする）

終わり

夕焼け空の町（前書き）

簡単なあらすじ、
朝も夜もやってこない町に越して来た青年の物語。

夕焼け空の町

その町で噂になっている異常現象。
それは、朝も夜も来ないというところだ。
俺はそんな町に越してきて、おそらく1ヶ月ぐらいは経った。

空はいつもうす明るく
日は昇るのか、沈んでいくのか、はっきりしない。
夕焼け空と俺は言うが、ひょっとしたら夕焼け空ではなかったりする。人によっては“明け方の空”という解釈もある。

（目覚まし時計が鳴る）
「んーーー・・・・・・・・・」
空はいつもこんな感じだが、決して時間が止まっているわけではない。
9時間も寝たのにまだ眠い、ここではそう感じることが多い。
時差ぼけとは違う気分だ。

（朝の登校）
「ふわああぁぁぁ・・・・・・」
「あれ、どうしたん？
まだ眠いの？　昨日十分寝られた？」
「そんなんじゃない。」
地元の友達は生まれた頃からこの町にいるので慣れっこである。
むしろ、朝昼夜がちゃんとある場所に彼を行かせてみたい。　これが普通の光景でも、見せたら驚くだろうな。
大学は朝から夕方まで8時間の授業。　どうでもいいが科学系の大

学だ。
時間の流れを教えてくれるのは時計だけ、
授業や研究などを行っていたらあっという間に過ぎる。
・・・時計と言っても日時計は無理がある。　空はずっとこんな感じだから分かるはずがない。

「ああ～～！　疲れた！！」
今日は夜の８時に帰ってきた
研究に相当時間を費やしたようだ。
晩ごはんを食べるにも、作る気力がなく
結局簡単なもので済ませて早めに寝た。

こうしてまた朝が来て、俺は学校に登校する
こんな生活あと何ヵ月経てば、慣れるだろうな。

終わり

１００の失敗　１つの成功（前書き）

簡単なあらすじ、

失敗を何度も積み重ねてこそ、成功は生まれるものである。

１００の失敗　１つの成功

「ゲホ、ゲホ、ゲホ！！」
私は今、不幸だ。　なかなか成功しないことに対して。
しかしそれが“嫌”という訳ではない。　成功なんてものは、たくさんの失敗を積み重ねてこそ完成するものだ。　一発で成功したとしても、私としてはつまらない。

いろんなものを調合してこれは作る。
みんなには分かりにくいだろうから、アルファベットで言い換えてみよう。

A、B、C、D、E、
この五つの素材を使って私の開発物は作れる。
さっきはBが多かったから爆発が起きてしまった。　私の研究で必要なものは、微調整をしながら千分の狂いもなく混ぜ合わせることである。　混ぜ合わせるタイミングも必要である。
しかし、この研究物にはさすがに黄金比なんてものはない。　だから失敗を続けたんだ。

よし！　今度こそ・・・・・・・

（研究物が爆発を起こす）
「だめか・・・・」
今度はCの配分が少なかった。　いや、Dを混ぜるのが早かったからか。
ここまで失敗が続くと、何が合ってて何が違うのか、根本的に間違っているのかも疑問になってしまう。

私はたくさんの失敗を続けた。
どれくらいかと聞かれたら、おそらく１００回ぐらい失敗した。
そして、

「ついに完成だ。」
これから数年、いや数十年は長きに渡り愛されるおもしろおかしの完成だ！

終わり

偽りのプロフィール（前書き）

注意書き、
実際にこんな事件はありがちですが　皆さんは決して真似しないように。

偽りのプロフィール

ここは、顔写真やプロフィールなどを交換する出会い系サイト。
ここではいろんな人が交流を交わし、気になる相手がいたら一緒に会う、
というやり方が支流である。
今回はそのサイトでよくある出来事を今から述べてみよう。

『偽りのプロフィール』

［名前、中塚志保］
職業、大学生
性格、わりと几帳面
趣味、手芸
得意料理、オムライス

「さて、わたし好みの男の方はいるかしら？
・・・・・・あっ！」

［名前、伊田将希］
職業、フリーター
性格、見かけによらず穏やか
趣味、スポーツをすること　でも最近仕事が忙しくてできない
得意なこと、記憶力がいい

「この人にしよう。」
カタカタカタ、
［やあ、あなた将希君って言うのね。　私は志保っていうの。よろ

しく！」
「・・・・・・・・・。」
カタカタカタカタ、
〔こんにちは志保さん。
　こんな僕でよかったら一緒に友達になりましょう。〕

この二人に焦点を当ててみるとしよう。
当初の二人はちょっと仲むつまじい感じだったがだんだん打ち解けが始まったのである。

〔このプロフィールだけじゃ将希君のことよくわからないな。
　あなたのことをもっと教えて。〕
〔実は僕、こんな容姿だから誰も寄って来てくれないの、顔とかも怖そうとか言われて。　僕のありのままを話せるのはおそらく志保さんだけだと思う。〕

〔今度私たち一緒に会えないかな？〕
〔いつ？〕
〔　月の　日、　時くらい　　公園で。　将希君が仕事で忙しくなかったら。〕
〔わかったよ。　その時多分空いてるから、楽しみにしてるよ。〕

こうして二人は一緒に対面する約束を行った。
そこからは長いので当日、二人は約束の　　公園まで来た。

「やあこんにちは。
　ちょっと見た目より老けて見えるかな？　写真がちょっと古すぎたかな？」
伊田将希という青年は写真とは裏腹に中年くらいの叔父さんだった。

「まあ、素敵なおじ様だこと、わたし好みよ。」
「えっ？　君もしかして・・・・、

男の子。」

「そう、わたしもどっちかというとあなたみたいな人がタイプなのよぉ～♪」

皆さんもこんな変わった恋愛があるかもしれません。
話はここで切らせてもらいます。

終わり

幻覚少女（前書き）

簡単なあらすじ、
彼女は見える人にしか見えません。

幻覚少女

僕の名前は、須和けいすけ。
いつもは高校に通う二年生、でも学校では勉強のことばかりだから、つまらない。
クラブとかにも入っていない。　僕は頭だけが鍛えられているだけで、体力になんて自信はない。

唯一の楽しみは、夜くらいになってからの時間。
弟も妹もいない一人っ子の僕だが、
夜になると、その子は突然現れる。

（ベッドに腰掛けて座る子が現れる）

彼女は金髪のセミロングで、赤い目をしていて、僕より少し小柄な子である。
鋭い表情をしているが、感情の変化が少し乏しいだけであって、別に怒っているわけではない。
最初僕がその子を見たときは驚いたけど、次第にかわいく思えてきた。

実際に彼女はなにひとつ言葉を話さないが、僕のそばにいる。
もうちょっと近くに寄ってもいいんだけどできない。　なぜなら彼女は人に甘えるということをやったことすらないからだ。

知り合った時は本当に何も話さない子だから、僕もビックリした。
　何を言っても関心を示さない子だったから余計往生した。
それから次第に打ち解けていって、もう仲良くなった頃だろう。彼女も次第に心を開きつつあった。

そんな彼女は僕にこう言った。
「お兄ちゃん。　どこにも行ったり、しないよね？」
「かっ・・・、かわいい！！」

「けいすけ！　うるさいわよ！
　早く寝なさい！」
「あ、ゴメンゴメン。」
ついうっかり声を上げてしまった。

アニメやゲームなどの掲示板にそれぞれの人の妄想を書けるスレがある。　そこではいろんな妄想やシチュエーションを膨らませることで、あたかも自分の周りにその好きなキャラがいるような気分になれるところだ。
僕はそこに書き込みながら、彼女を動かしたり喋らせたりするんだ。

終わり

心の曼荼羅（前書き）

簡単なあらすじ、
曼荼羅とは仏の教えなどで自分の心に思い描いているものが円の中に現れるものである。

心の曼荼羅

俺はどんなことにも関心が湧かない。
同じことの繰り返しで、だんだん飽きが来ていた。

やっていることは1週間の周期でローテーションしている。　この前何をしたかと聞かれると、おそらく覚えていない。
会社に行く途中、コンビニに立ち寄ったかもしれない。うっかり遅刻をしてしまって、課長に怒られたかもしれない。家にはいつも夜１０時くらいに帰ってくる。　夜の道は恐いので、人通りの多い明るい道を歩く。
だめだ、やはりなにも覚えてない。

自分で歩いてるこの道も、何度も見慣れてしまって、面白くない。
　どこかの民家の塀が変わったわけでも、道を直したりすることだってない。
そう思っていた矢先だった。

（ドリルの音が鳴り響く）
「すいません、迂回してください。」
「・・・・・・・・・」
曲がったところで工事が行われていた。

鳴り響く工事中を物語らせる音を聞きながら、俺は別の道を歩いた。
「！」
「すいません、迂回してください。」
ここでも工事が行われていた。　他のルートを歩いて、同じ場所へ

戻って来たわけでもないのに。

それから俺は走った。　工事している現場には、他にも１０回以上は遭遇しただろう。
それまで何もなかったはずなのに、いきなり起こるそれは、俺がいつも歩くルートを狭めていった。

やっとのおもいでたどり着いたのは、周辺地図の立てられた看板の前。
俺はそれを見た。
「うそ・・・・・・、だろ・・・・・・・・・・」
そこには円の中にいろんな模様が描かれたものがあった。
それはまるで・・・・・・

終わり

ＬＩＦＥ　ＬＩＮＥ（前書き）

簡単なあらすじ、
男が見ているそれは錯覚か幻か、はたまた現実か

LIFE LINE

俺はどこかに迷いこんだ。
そこは、現実と呼ぶには程遠い世界だ。
光は射し込んでても、限りなく深い林の中にいる。　横には清んだ川がせせらぎを立てながら流れている。　そして、鳥やリスなどの小動物が仲良くしている。
とてもメルヘンチックで、なんだか心が和む。

でも疑った、これは夢なのか？
頬を少しつねってみた。

痛い

どうやら本物みたいだ。
いま見ているこの光景は、いま聞いている自然な音は、本物らしい。
立ち止まっていてもわからないので、この限りなく続くだろう林の中から抜け出せるように歩いてみた。
確かこういうところは川の下流を辿っていけば外に出られると聞いたことがある。

この場所にいると、何もかもを忘れたくなる。
戦争とか社会とか、環境問題とかが、バカバカしくなってくる。
争いなんてものはない、空気な水などを汚すものだってない。　ましてや身分制度や権力すら、何ら意味を持たなくなってくる。
探検をしているうちにこんなことを考えてしまった。
これこそが人々の思い描いていた、理想とする世界の在り方なのだろう。

（歩いてる途中にうっかり足を滑らせる）

「あっ！？」

ポチャン

つい周りの風景に見とれてしまい、足を滑らせてしまった。　川の中は思った以上に広くて深い。

それもいいんだがさすがに水の中なので息苦しくなってきた。早く上がらないと・・・・・・・・・・

ザパーン

（別の場所に出てくる）

「・・・・・・・？」

そこで俺が見たのは、さっきまでの景色とは裏腹に、

空は曇っている、しかもあまりいい色ではない。

俺が浸かってたこの川の水も、ドブの匂いがキツくて気持ち悪くなりそうになった。

（パトカーのランプやヘリコプターのプロペラの音がする）

「！・・・・」

状況を確認すると　俺は警察に包囲されているみたいだ。

「　　！！　動くな！」

「殺人容疑で逮捕する！」

なんなんだ？　この世界は、

俺は一体何を

終わり

僕はみかん。（前書き）

簡単なあらすじ、
出荷前のみかんの気持ち

僕はみかん。

僕はみかん。

さらに言えば愛媛産の。

いまはまだ緑色なので、出荷もされないし食べ頃にはほど遠い。

味は甘かったり酸っぱかったり、

まあ時期にもよるようだけど。

仲間の先輩はいろんなところに行っているようだ。

こたつを囲んで一緒に食べられたり、冬場の寒い日にお風呂に入れられたり、

ヨーグルトに混ぜられたり、

ミックスジュースやフルーツポンチに他の友達と一緒になったりするらしい。

もしも僕だったら、やっぱりオレンジジュースのように、僕ら同じ仲間の味だけで楽しんでもらいたい。

あれこれを考えてるうちに、僕にも明るい色がついてきた。

生産者のおばちゃんは僕たちを優しく丁寧に木から取っていく。

仲間の中には虫に食べられたり腐ったりしていて棄てられてしまう子もいる。

さらに大変な子は明るい色がつく前に病に侵され酷いことになってしまう、最後まで大人になれないのもいるからね。

僕たちは段ボール箱にみんなで詰められ、トラックで運ばれる。

それから先、どうなるかはわからない。

友達と一緒にフルーツポンチに入るのか、ミックスジュースにされるのか、ケーキの上に乗っているのか、スポンジの布団の中で眠るのか、

そういえば化粧品という選択肢もあったかな？

あれこれ考えても結局は、手にとってくれる人にもよるだろう。

僕はみかん。

伊達メガネ

俺は名も無きメガネ。
でもガラスやレンズらしきものはついていない穴開きなので、　みんなからは伊達メガネとよく言われる。

生まれたときはよく覚えていないが、
おそらく５０年近く生きている。
所々傷ついてはいるがあまり目立つような傷はついていない。
なぜなら月に一回点検があって、目立つような外傷があれば直しているからだ。

俺はいつも起きている。　いや、むしろみんなが俺を寝かせてくれないと言った方が正しいか。
それにいつも同じ場所にいるので、俺には寝る時間すら与えてくれない。

いつも同じ景色を見ている気がする。

ブーーーーー・・・・・・・

ちょっ！　俺のちょうど真下で鳴らすんじゃないよ！

ワイワイワイワイ、

子ども達はいつも元気だな。　その元気を俺にも分けてほしいぐらいだ。

チリーン、

自転車が来たぞ、子ども達も避けるんだ。

ガタンガタン、ガタンガタン

今日はいつにも増して乗客が多いな。
もう少し時間をあけて、乗るべきじゃないか。

ピー！　ピー！

こらこら仲良くしろお前達。通勤で混んでイライラするのはわかるが、並ぶということも大事だぞ。

そう、俺は“伊達メガネ”という名前のメガネ橋である。

自己目標予算

「今日あなたの行ったことの集計をします。
禁煙を3時間以上した、自転車で5ｋｍまで移動した、昼寝をしなかった、ご老人１０人以上に・・・・・・」

いまやっているこれは、俺が今日一日で行ったことを集計している。
目標には大きく分けて2種類ある。
DからSまでランク付けされたものから、特殊な行動を行ったときにつけられるものなどがある。
目標の達成ごとに謝礼金が貰えるといったシステムである。

「以上から、ランク付けの目標6点と特殊な目標3点がされたので、合計6万2千8百円をお支払いします。」

ただ難点な所は、いつも監視が行われているらしいので少しでも不審な行動や悪い行いをやっていると引っ掛かるような気がして落ち着かない。　そんなことだけあって、こんなことをやっていることを知らないみんなからは親切な人だと思われている。　特に子供やお年寄りのみんなからは。

「えー、今日は特殊目標である　　屋の　　まんじゅうを食べましたから・・・・・」

特殊な目標にはいろいろあるのだがその中の一つを挙げるとすれば、食に関心の無い俺にとっては少し辛いが、その場所に行って珍しい食べ物を食べるといったものがある。　行列のできるところから限定で数個しか発売されていないもの、さらには誰も知らないような

場所や食べ物まで中にはある。　食べ歩きの好きな人にはもってこいだが、俺には辛いだけだ。
最初のプランを立てた都合により、この目標は一回でも達成されればもう行う必要はなくなる。

「以上から、ランク付けの目標４点と特殊な目標１２点がされたので、合計１８万４千３百円をお支払いします。」

はっきりいえば、目標の中にももう次はやりたくないと思うものもある。　結構疲れたり、普段からあまりやらないものもある。　生活習慣が正せたり、達成した後の快感がいいのかもしれないが、俺にはそれが当たり前のことになってしまっていてもう悦びという感覚はない。

「おめでとうございました。」

さて、今日の目標は終わった。　また明日も頑張ろう。

増減辞書

店の主人に勧められて渋々買ってみた。
主人が言うには、その辞書は地球上で使われているあらゆる言葉をそれに書いたり消したりすることで、増やしたり減らしたりすることができるらしい。
そんなオカルトみたいな話は信じられるわけないが、主人が強く押してくるので仕方がなく買ってみたわけだ。

ただしかし、言葉を増やしたり減らしたりすることに何の意味があるのだろうか最初は疑問だった。
私が道を歩いていると近所の方でおばちゃんたちが、
「うちのところにまたゴキブリが出たんですよ、いつも綺麗にしているのになぜでしょうね？」
「うちなんてネズミが出てきました。」

そんな会話を耳にした後、しばらくして部屋に戻り面白半分でやってみた。
「この辞書からゴキブリとネズミを消したらどうなるだろう。」
と思って辞書の中に載っている“ゴキブリ”と“ネズミ”の項目をマジックペンで消してみた。

その翌日、その道を通りかかると、
「お宅のところはホコリ気になりませんの？」
「ええ、だいたい3日置きに掃除してますから。」
「うちは週に一回しか・・・　」

私はその会話を聞いて驚いてしまった。　辞書で消した言葉はその

生物の存在を消すどころか、人々の中でも忘れ去られたように言葉が出て来なくなっていた。
まだ信じることができなかったので、とりあえず会社の同僚に部屋にゴキブリがよく出て困っている奴にも聞いてみた。
「ゴキブリ？　なにそれ？」
「・・・・・・・・・・・・・」

どうやら主人の言っていたことは本物のようだ。
それを知った矢先に、堅物な部長に説教されている同僚を見ていた。
「一体何をやってたんだ！
お前みたいな適当な仕事しかできない奴はいらないんだ！！」
「（・・・・・・・・適当・・・）」

それを聞いて私は辞書から“適当”という言葉を消した。
そして会社に来ると、周りにいる人々はすべてキッチリしていて何とも異様な光景だった。
「兼田！
お前最近鈍ってるんじゃないか？」
「ああー・・・、　すまん。」

人々の中から適当という言葉が無くなるとこうなるのか、と私は自分の中で納得を覚えた。

「空気読めねえよなあ・・・・・」
最近になって流行しだした言葉だ。　この項目はさすがに辞書には載っていない。
なので私は“空気読める”という項目を足してみた。　すると、

「買ってきましたよ。」

「・・・・・これじゃないんだよな。」
「そういうと思ってたくさん違うもの買ってきました。」
読めてるのかは定かではないが、人々の中で阿吽の呼吸らしいものは見えた。

それからどうしたかというと、あまりよくない言葉や、さらには人々の間で都合が悪くなる言葉などを消去したりした。
しかし私は頂点につくわけでもなく、上の立場の者を懲らしめる程度にしか使っていない。
もし間違った使い方をして自分が何でもできる全能な神だといって、それに複数の人が反逆する恐れがあると考慮したからだ。

そう、私は神様のようなすさまじいすごい存在ではないのだから。

微妙な段差

うちの家には、微かだが段差がある。
これだけを聞けば階段や部屋ごとの区切りとして普通にあるような感じもするが、そうじゃない。
まるで家を二つに区切るように渡り廊下などに縦に入っている。
私はそんな家に一人で住んでいる。

これはあくまで私の見解だが、この家は体の不自由な人では不便だろう。
車イスや足の不自由な人は、こんな段差でも往生するかもしれない。
不動産業者もそのことについては一切触れなかった。　ただ、普通より格安だったのは覚えている。　少しだけ引っ掛かったことは、「決してマイナス思考に考えないでください」とだけ言ってたような。

「おはようございます。」
「あ、おはようございます。」
近くの人々は何も言ってくれない。
過去に事件でも起きたのか、自然現象でこのようなことになったのか、元々こんな地形なのか、聞きたいのは山々だが、理由を聞いてよくないことだったら恐ろしいから聞きにくい。

こんなことあり得ないと思うが、この微妙な段差がもしも私の心の中の何かだったとしたら、私は何を根絶しているのだろうか？
近所の人たちだって深い関わりは持ってなくとも、決して冷たくされたとかはない。

もしかして、私も近所の人々も本当は忌み嫌っているのではないだろうか。
みんな外面だけで、本当は私をうざったいと思っているのだろうか。
突然来たよそ者に愛想なんて振りまけるわけがないのだろうか。
私はついそんなことを考えてしまった。

（家の中が地震のようにガタガタし始める）
「！！」
やっぱり、あまりよくないことは考えるべきじゃないか・・・・・・

（段差の部分が逆転して家ごと地面に埋もれる音がする）

選択肢

「（今日はなにを食べようか・・・・）」

↓［軽めにする］

［がっつりしたものにする］

「よし、軽めのものだからおにぎりかサンドイッチにしよう。」

我々は常に選択肢に囲まれて生きている。

こう言ってしまえば哲学的になりそうな話だが。

選んだ道によってまた違うものも見えてくるのだろう。　しかし、たとえたくさんの選択はあっても選べるのは一通りだけ。

なので場面によって慎重に行ったりまわり道なんていうものもよくある。

すべての物事に対して選択肢を行っても埒が明かないので、ここではじっくりと考えられ、選択肢も比較的少ないものをあげてみよう。

「学校も終わったー、　さてこれからどうしようかな？」

［そのまま帰る］

［部室に行く］

［友達の家に行く］

↓［足を延ばして大きめの街へ行く］

「ちょっと探し物をしてみようかな。」

電車の中で、目の前で切符が落ちたのを見てしまった。
「（この子切符落としちゃったよ、どうしよう・・・）」

［声をかけて知らせる］
［見なかったフリをする］
［自分で拾って渡す］
↓［動作で落ちている切符に気づいてもらえるように仕向ける］

「（声をかけるのは苦手だからとりあえず気づいてもらえるようにしてみよう。
駅を通る時に切符がなかったら困るかもしれないし。）」

電気店は街に大きく建っているだけあって、何でも揃っている。
「おっ！　新型が出てる。　でもどうしようか・・・・・」

［今すぐ買う］
↓［もう少し時期を待ってから買う］
［絶対に買わない］

「・・・・・もう少し待つか。」

そう、俺はこうして今日も生きている・・・・・・

ただ立っているだけ

ただ立っているだけ

子ども達は今日も元気よく歩いて行く。

ただ立っているだけ

おじさんがすぐ近くで物陰に隠れてタバコの吸いがらを捨てる、ポイ捨てはよくない。

ただ立っているだけ

近所の子犬がおしっこしてくる、しつけはしようね。

ただ立っているだけ

鳥は止まり木のごとく止まる、一匹や二匹どころではない。

ただ立っているだけ

登ったら危ないからやめなさい。

ただ立っているだけ

子ども達が近くで凧上げやラジコンなどをする、うっかり引っかけないように気をつけること。

ただ立っているだけ

あそこの可愛い子ちゃんが自転車で角を曲がろうとする、空はもうすぐ暗くなるのでそんなに速く走っていると危ない。

そう私は、私たちは電柱である。
発しているこの言葉も人にはまったく聞こえない。

ただ立っているだけ。

不死鳥男

俺はいつでも死ぬことができる。
これは本当のことだ。
しかし、そんなチャンスを今まで棒に振ってきた。
棒に振り続けてもう２０年が経った。

一回目は俺が幼少のときだった。

友達の大事なものをうっかり壊してしまったときだった。
わざとやったわけではないに、大事なものは俺の足元にあった。
謝ることでどうにかなることでもないと思った俺は意を決した。

しかし、そんな勇気もなくて結局謝る道を選んだ。

二回目は中学生のときだった。

よくキレやすかった俺でもそれでもかなわない相手がいた。　両親だ。
言いつけを破って俺は漫画やゲームに打ち込んでいた。
成績が悪い、なぜと聞かれても、俺には返す言葉もない。
これからもこんなことばかりかもしれないと悔やんで俺は意を決した。

しかし、イメージトレーニングはできているものの、なかなか行動に移せず

俺は自分でできる限りの努力を行っていた。

三回目は高校2年のときのことだった。

毎日が勉強に押される日々、休日でも学校に関することをやらされ、
毎日気に入らない先生の話ばかり聞かされていた。
これ以上やっても身が持たないと思って俺は身を投げ出す決意をした。

しかし、次のアニメや漫画の続きが気になって結局することができなかった。

そんなことを続けてもう20年、
俺はまだ生きている。
いまの生活環境はそんなに悪くない。
こんなのが永遠に続いてほしいと思ってはいるが、それはやはりかなわない夢である。

この場で俺は何か嫌なことがあったら、
また投げ出そうと思えてしまう自分に恐怖すら感じてしまう。

どうやら俺は“死なない”らしい。

ながいもの

「？」

いまだアスファルトに埋められていない道を歩いていて気づいた。
足下に見たのは、金属のような紐だった。
試しに握ってみたら、硬い感触がある。
最初はただ地面に落ちているゴミだと思っていたが、どうやらそうでないらしい。

埋まっているのかと思って試しに引っ張ってみた、紐はまだ続いている。
もう一つ手繰り寄せてみた、まだまだ続いていた。
もう一つ、もう一つ、引っ張っても引っ張っても紐らしきものは続いている。

さすがに手が疲れてきたので今度は体を使って力押しで引っ張ってみた。　それでも先は見えてこない。

１ｋｍ、１０ｋｍ、３０ｋｍ移動しても引っ張り続けるが何もない。
地面に伸びているこの謎の紐は、一体何なのだろう？

「おい、誰かがこの栓抜こうとしてるぞ。」

「そんなことをしたらすべての山はたちまち噴火を起こすぞ。」
「でも地上にいる人間がやっていることだから、どうすることもできない。」

超重力の部屋

「う～～～～・・・・・・・・・・・・」
（ベッドから起き上がる）

はっきり言って、俺はすごいところに住んでいる。
この部屋では様々な向きに重力が働く

・・・という管理人さんからの説明を聞いた。

この日は壁に重力が来ている。
ベッドで寝るには立った状態にならなければならない。
実はこの部屋、重力が変わるのは人間の俺だけでまわりのものはそのままである。

今回は天井に重力が来た。　部屋の行ききには大きな段差があって、キツ過ぎる。
しかもその日はいきなりきたので、うっかり机の炭酸飲料をコップについだまま、栓をするのを忘れていた。
もしも閉める場合は天井などに吊るされた電球よりも小さいので焦らず慎重にひねらなくてはならない。
ボトルやコップは道具なので、こぼしたらおおごとである。

コン　コン　コン　コン　コン

「できたっ。」
部屋の行き来に困らないように、壁や天井にも階段やはしごをつけてみた。
これで不安な点はなんとか解消できただろう。
あとはその重力に傾いたときに、階段やはしごにぶつかってケガをしないように気をつけるだけだ。

疲れさせ屋

「ご用件は何ですか？」
「疲れさせてほしいんです。」
「どなたをですか？」
「・・・・・・自分を。」

友人に紹介されて、しぶしぶ利用するようになったこの会社は、
決められた人を選んで疲れさせることができる。
その対象は特に決まっていなく、他の人を疲れさせることも可能だが、僕の場合は自分に使ってる。

元々ここは、会社の成り行きを見る限り裏稼業である。
相手が疲れて弱ったところを襲う、
そんなやり方なんだろうな、多分。

「こちらに行ってください。　連絡はこちらから取りました。」
「はい。」

ランクもいろいろある。
僕だけを殺し目的で疲れさせるわけではないのでいつもDである。

「いらっしゃい！　よく来てくれたね！！」
紹介されたのは建設業者で材木を運ぶバイトである。
「なかなか来なくて困ってたのよ。　今日8時間だけいいかな？」
「は、はい！」

「よいしょ！　っと、」
当然のことだが、僕は仕事がしたくてここに来たのではない。
疲れるものなら別になんでもいいんだ。
この前他の友人に教えてもらった近場にある銭湯は、疲労などに効くと言われた。
それに入るのを楽しみにしているが、ただ入るだけではつまらないので、疲労が困憊になりそうなほど体を動かしてから入る、という僕なりの考え方で楽しんでいる。

チャポン、
「はあ～～・・・！　疲れた！！」

勧められた仕事は重労働だった。　しかし、嫌じゃない。
仕事の依頼とバイト料のことを考えれば、一応は元取れてるからいいか。
それに体力も付くなら、一石二鳥だし。

しかし、残念ながら毎日こんなことはできない。
僕の体のことも問題になってくるからね。
一生懸命動かして銭湯に入っても、下手すりゃ筋肉痛が1週間長引くこともあるから。

ディスプレイ砂嵐

ザーーーーーーーー・・・・・・・

皆さんはこの景色を知っているだろうか。
これは、アナログのみで体験することができる世界。
そこには荒々しい雰囲気の場面から、鳴ったり止んだりする音。
今はまだ見れる放送も、いずれこうなってしまうと考えたら、

これ以上は言えません。
今回はそんなお話です。

「気を付けろよ！　まったく、これだから貧乏人は困る。」

どこにでもいそうな偉大な父を持つその息子。　すごいのは父親であり自分は大したことのない道楽息子。
その子は昔っから一人っ子であるのでまわりの遠慮なんてまったくしない。
この子を取り上げて見ましょうかね、　ひひひ。

ゴンッ！
「あっ！　　イッテ〜！」
道を歩いているとその少年、足を何かに躓いた。
一応はゴミ捨て場に捨てたのだろう捨てた主、捨ててあったのは一

台のブラウン管テレビ。
しかし、ゴミ捨て場からはみ出しているところを見れば下手をしたら不法投棄にも近い状態。
当然のごとく怒り狂う少年。

「誰だこんな時代遅れなもの捨てた奴は！」
力いっぱい蹴った少年、当然痛くないわけがない。
しかし古すぎたせいかそのテレビはガシャンという音を立てながら割れる。
その時だった！

「ワアーッ・・・・・・」

どこかに吸い込まれた少年、一体どこへ行ったのか？

よくよく見たらそのテレビ、
画面は壊れているのに動いている。
「どこだここは？　なんか割れてるものがある・・・
　ひょっとしてテレビの中！？　　あ、待って！　持ってかないで～！」

ものにはそれぞれ神が宿っている、もちろんそれは機械も例外ではありません。
刻々と迫ってくるデジタル化、早く出なくては激しい砂嵐に襲われます。
果たして少年の運命は？
しかし話はここでおしまい　　m（__）m

あべこべ時代

ここは、かなり新しい文明だと言われてる世界。
歴史を辿ると底はかとなく深いので掘り起こさない。それに俺は実際に目に見えるものしか信じない主義だ。

まわりには人間と“機械”と呼ばれる人形(ひとがた)のものが共存している。
　これが地球という星ではあり得ない光景らしい。
彼らはともに遊び、ともに仕事をし、ともに励まし合う。
すでにほとんどのやつらはロボットさんと小さいときからいるから、見た目の違和感とかいうものはない。

しかし、こんな進んだ文明だとしても自分の意思を持って行動できるものはほんのわずかである。
中にはまだ人の操作や指令によってしか行動できないものも数多く存在する。
そんな者達がもし集団で反逆でもしてしまったら・・・・・・

「キャーーーーーー！！」
「やめろ機械のくせに！」
「・・・・・・・・・」　バチィ！
「ああっ！　耳が～！！」

そう・・・、　彼らは考える能力がなくても人間にはない力を持っている。

「おい、うちの社のデータがなくなってるぞ。」
「こっちもです。」
パッ
「おっ！　ついた・・・」
（ディスプレイに他の女性と個人的に一緒にいる社長の画像が出てくる）
「ガッ・・・・・・」　バタッ

機械という特権を駆使して本人達さえわからないものを流すことが出来る。

さらに、意思を持つ必要のないものまで人間を入れられてしまったら。

〔勘弁してくれ～！　今日はもう休ませてくれ～！〕
列車やバスなどの交通機関に詰め込められたら、　体力のない多くの奴らはへばりやすいのですぐに息切れしてしまう。
それでも機械の者達はそんなのお構い無しに走らせる。

そうすると人間と機械の間で激しい戦争が始まった。　この戦争が終わる頃には、どちらか片方だけが残っている結末だろう。
俺は人間には勝算がないと思う。

彼らなしでしか生きていけない生活を俺たちは送ってきたのだと、改めて痛感する。

今まで説明してきたロボットの反逆は、俺が自分の中でイメージしたものを見せた、それだけだ。
そんなことが本当には起きてほしくはない。
だから、機械にへり下るまでいかなくとも、互いに仲良く生きなければならない。

異星人学校

「朝のホームルームを始めるぞ！」

みんなはおそらく他の国の生徒が留学生として通う学校はよく知っているだろう。
しかしここはもっとすごい！
留学生は異国どころか異星から来ている者たちである。
なので、それぞれの文化も異なる。　国境ならぬ星境（せいきょう）を越えて交流をしているわけだ。

ちなみに今回の語りは担任の大星（おおほし）だ。

「先生！　火賀くんは今日風邪で休んでます。」
「なんだあいつ～？　火星人なのに熱になるのか？」

ここではこんな会話も普通にある。　決してえこひいきではない。
「出席を取るぞ。　青木。」
「はい。」
「金子。」
「はい。」
「菊地。」
「はい。」

この学校はまだ名門でもなければ、人に知られてるかどうかもわからないマイナーな学校である。
それゆえひとクラスの人数も少ない。
いや、　正直なところこのひとクラスしか今はいない状態だ。

休み時間や放課後を見てたらそれぞれだが、やはりみんな星は違えど人間であるわけで・・・・

「こら金子！」
「ひっ・・・！」
「また小銭探しか。　わからないようにやれって言ってるだろ！」
「違うんです先生、僕が飼ってた黄金虫が逃げたんです。」
「そうか、あんまり危ないとこには行くなよ。」
「はーい！」

「火野！」
「？」
「校舎でタバコを吸うんじゃない！
ライターも没収、手で着けるなよ。」
「大星のやつ　真面目振りやがって・・・」

「水野！　土田！
校庭で畑を作るんじゃない！」
「なんでですか？」
「だってこんなに大きいんですよ。」
「校庭はみんなで使うものだし、それにそんなところにボールでも飛んできたら困るだろ。」
「確かにそうですね。」
「でもせっかく作ったのにどうすればいいでしょう？」
「そうだな、畑の形を崩さないように場所移動・・・
そうだ、畑のまわりにだけ小さく地殻変動を起こして、盛り上げてから別の場所に運ぶ。　これならどうだ？」
「なるほど。」
「うまく応用してから起こせ、土田　お前ならできるだろ？」

「あ　はい、ありがとうございました。」

と、こんなことがこの学校では日常茶飯事である。
どれも確かに校則には書いてないことばかりだが、彼らはそれぞれ特殊能力を持っている為、あまり厳しく説教はできない。
なぜならその力を使って暴れられでもしたら私も校長もお手上げだ。
地球に住んでる皆さん。　ご理解して頂けただろうか。

友好条約

「「僕たちは、私たちは、　今までずっと犬猿の仲でいた・・・。しかし、限りある残りもそろそろ底をついてきた。」」
「今　僕たちにできることは。」
「互いに手と手を取り合って。」
「助け合うことなんだ。」
「「だから僕たちは、私たちは、今ここに友好条約を結成します！」」

この、今まで仲の悪かった二者はついにこうする道を選んだのである！

「決して交じり合うことはないと思っていたけど、」
「ついにこんなことをしなくてはいけないときになったね。」

コーヒーとミルクも。
プリンと果物たちも。
野菜とケーキも。
パンとマーガリンも。
バニラとチョコレートも。
ごはんとカレーも。
ラーメンとライスも。

「それぞれ共存しながら生きているじゃないか！」
「僕たち水と油も交じり合って生きてゆこう！」

水道の蛇口をひねって水を飲む子ども
「ぺっぺっ！　まずい！　　みずなのにヌルヌルする～。」
顔を洗う男性
「なんか、洗った感がまったくない・・・」
まだ残り火のある吸殻の火を消そうとして
「わあっ！　よけい燃える！」
ストーブを着けようとする婦人
「ちゃんと灯油を入れてるのに全然着かないわねえ。　壊れたのかしら。」

水と油は思った。
“やはりお互い仲良くしようにも、一緒にいると吊り合わないから無理っぽい”と。

誰かの夢

「・・・・・・・・・」

ぼくは空を飛んでいる。　何処へ行くのかは定かではないけど、渡り鳥のようだ。　どの地域に行ってもぼくは通りすがりで、止まって羽を休んだらすぐに飛び立つ。
飛び立つときは後で来た人にわからないようにするのが暗黙の掟だ。

「・・・・・・・・・」

ぼくのまわりに形や大きさは違えど同じ仲間がいる。　自分で動くことはできない。
ぼくは森の中の一本の木らしい。

ウィーーーーン！！

突然チェーンソーかなにか機械のような音が鳴り出した。
ぼくは直接見たわけではないけど、木が倒れるようなものすごい音が聞こえる。
その音に驚いて目覚めてしまった・・・

「・・・・・・・・・」

道をとぼとぼ歩いている。　人間にしてはちょっと遅めに。
その時誰かと遭遇した。　しかも相手は犬だ。
〔おい、また新入りが来たぞ。〕
〔あーあ　可愛そうだな、お前みたいなやつまで捨てちまう人間が

いるなんてなあ。」
会話を聞いててわかったのはぼくは捨て犬らしい。　先輩も元々飼い犬だったが飼い主の無責任なことに捨てられてしまったそうだ。
水溜まりを鏡変わりに覗いたらチワワだということはわかったけど、話を聞いてて先輩である彼らは優しかった。
やっぱり人間が憎いんであってぼくのような同族の気持ちがわかるんだな。

「・・・・・・・・・」

今度は広い場所、コンサート会場みたいだ。
しかもまわりにはすごい数の人、もしかしてぼくが歌うのか！
人の多さや会場の大きさを見る限りぼくは世界的なスターらしい。

♪〜〜〜

「！！」
当然のごとく音楽が流れてきた。
しかもぼくだって聞いたことがない曲、歌わなかったときのことを考えてみたらぼくはあせあせしてしまい急いで飛び起きた。

これらを見ていて思ったことは、古文で習った“胡蝶の夢”を思い出した。
ぼくがこんな夢を見ているとき、きっと誰かもぼくの夢を見ているに違いない。

アイスクリームの気持ち

どうも、アイスクリームです。

しゃべり方が少々冷めていますが、これは仕方がないんです。
あんまり熱くなり過ぎると私溶けてしまうので。
では今回は、私たちのことについて語りたいと思います。

私たちがよく活躍するのはおもに夏のような暑い時期です。
子ども達は暑さを凌ぐために買います。
果物やかき氷のみんなもライバルです。　と言ってもライバルであって仲が悪いというわけではありません。
なぜなら私たちやみんなを一緒に食べる人も中にはいるからです。
それに二段や三段にしたアイスもよくケンカになります。　味が混ざるや、なんでオレだけ落ちるんだとか。

冬場になるとあまり買われません。　なにせ寒いので。
でも人によってはこたつに入っていただくとか、温かい飲み物と一緒にいただいています。

春に近くなると主にイチゴ味が増えます。　さらに受験生のみんなのために合格祈願に基づいたグッズや食品が販売されます。
私たちアイスクリームも例外ではありません。

人々は“限定”という言葉に弱いみたいです。
期間限定としてたまに発売される私の後輩は、変わり物や新商品に目がない人にとってはもってこいです。

それでも通な人は私たちのような王道を選び、変わったものなんて邪道だと言います。
結局意見は人それぞれです。

というわけで私たちは冷たい存在なので、限られた時間しか活動することはできません。
私もそろそろ溶けるのが心配になってきたので、話はここで終わります。
ありがとうございました。

茂みの中

僕はいま、道なき道を歩いている。
道と呼ぶにはほど遠い場所だ。

確かに危険なことだとはわかっている。　しかし、僕という開拓者がいない限り、ここはいつまで経ってもこのままだ。
誰かが開かなければ、こういったものは生まれない。

険しい道だからこそ付き物がある。
そこら辺の植物に引っ掛かるかもしれない。
そこら辺にいる毒を持った虫が襲って来るかもしれない。
雨が降ってぬかるんでいるときは、足を滑らすかもしれない。
目に見える危険を予知しながら、慎重に歩いている。　こうしても、やはり怪我するときはする。

工事のトラックやコンクリートを使えば簡単だという声もあるだろう。
しかし僕にとってそんなことはふざけている。　複数の人で作業をし、機械に頼っている。　まるで苦労をしなくなったかのようだ。
誰か一人が倒れても、誰かが見つけてくれるところはありがたいが。

この道を抜ければあの町が見える。　みんなはまだ知るよしもない。
こんな険しいところなど、苦労してまで通りたいかと聞かれたら、そんなことはない。　だから知らないうちに開く。

いつかはこの険しい道も道らしくなり、歩くところは土になり、うえには木で出来たトンネルがあってその中をくぐる。

そんな時が来ると信じて、僕はこうして歩き続ける。

一滴の水

一滴の水です。
みんなが溜めている水には僕のようなのがたくさん集まって成り立っています。
ゆえに僕一人だけでは何の役にもなりません。

僕は一人とは限りません。　いろんなところに複数存在します。
ある所はコップに注がれて飲み水になり、ある所は動物や植物に必要な栄養源になり、ある所はお皿や車などのものを洗い、ある所は門の近くに撒かれて暑さしのぎになる。
そしてそれが繰り返し行われています。

よく他のものとも混ざったりします。
人は汚いと罵る泥水だって砂のかけらが僕の中でちょっとだけ休んでるだけなのに。
醤油やみりんのような調味料が入って来ることもある。　この場合はそれぞれがケンカにならないように互いに譲り合いながら場所を取っている。

冷たいところで固まったり空気中を漂う仲間もそう、僕らが集まって成り立っている。
姿が変わっても、僕はその中の一つだ。

そして僕はいま、
締まってるはずの蛇口から漏れて出てきて、　どこかの民家のキッチンにいます。

現実世界に生きる

僕は時々思ってしまうことがある。

なぜ現実のこの世界に生まれてしまったんだろう。

空想の世界に憧れたことがいくどあったことか。

空想なら誰かが描かなければ生まれて来ない。

現実ではあり得ない力をたくさん身につけてどこまでも強くなれる。

死んだら死んだで今の僕ならそれも悪くないと思う。

自分に特別な力があればどれだけ羨ましいことか。

人知れず世界の平和を守っていることを自慢できる。　近くにいる友達すらその事実を知らないとさらにいい。

力を使って好きなあの子を守り、振り向かせたり興味を持たせることだってできる。

仲の悪いあいつらを立ち向かえない敵から守り、改心させたり和解することができる。　自分と関係のない奴らでもそれによって改心したり本当の気持ちを伝えられたりすることができればそれでいい。

力でねじ伏せるとかえって悪い印象を与えてしまう。

しかし現実はあまりに厳しい。

目に見える悪もなくて、僕一人の力はちっぽけすぎてなにも変えられない。

そんな力もないから好きなあの子もは振り向いてくれない。

ムカつく奴らもちっとも改心しないままどこかへ行ってしまった。

　それに腹立たしいと思っているのは僕だけで、みんなはそうは思

っていない。
勢力は相手が大きすぎて僕は孤立していた。
そして僕は今誰も知らない新天地にいる。
自分の特殊な力で、誰かを幸せに出来たら・・・
と、そんな現実逃避をしてみる。

コーディネート（前書き）

※意見：擬人化した描写があります。

コーディネート

ここはとあるファッション店である。

「お客様のような肌の白い方には、この赤い口紅がお似合いかと。」
「いや、こっちより赤い宝石の方がいいかな。　ついでに中にも散りばめてちょうだい。」
「はい。」

こうしてイチゴのショートケーキは生まれた。

「このちょっと黒めの服と、あとシュシュと削ったやつも。」
「ええ、とてもいい感じです。　色合いもすべて同じ感じで。」
「そうね、これならもう少しガングロでもいけそうね。」

こうしてチョコケーキは生まれた。

「私ってけっこう縞々が多いのよね。　どうすればいい？」
「では、これをかけてみるのは。」
「いや、もうちょっと濃くてもいいかな。」
「じゃあこちらは？」
「あ、それそれ。」

こうしてティラミスは生まれた。

「お客様はここ初めてですか？」
「はい、私引っ込み思案なので。」
「ではそんなお客様はそのままの状態で引き立つようにしてみましょう。」

お客様は全体的に秋らしく、黄色いペンダントにちょっとおしゃれを入れたフリルのついた服で。」
「ど、どうかなあ？」
「とてもお似合いです。　やはりお客様は土台がいいですから。」

こうして、モンブランは生まれた。

「私は一個なんてめんどくさいことなんてしないわ。　ここにある宝石とかいろんなものをちょうだい。」
「お客様、ちょっと派手じゃありませんか？」
「いいじゃない、私はたくさん持ってるわよ。　あ、これもいいかも。　」

こうして、フルーツ山盛りのケーキは生まれた。

ここでは全員が十人十色で被る者は大抵いないという。

一年畑

季節は春、
川の近くに立つ桜は満開になります。
ここには辺り一面が黄色くなるほど菜の花でいっぱいになります。
花のまわりには黄色い蝶やミツバチが花粉を探しにやって来ます。

季節は夏、
近くの桜は青々した葉をつけ、セミが木に止まって元気よく鳴いています。
ここにはスイカがたくさん実っていますが、他のところでは稲が大きく伸びて穂もつけています。
青々した葉っぱにはバッタやトンボのような昆虫、水辺のある田んぼではカエルが夜遅くになるまで合唱を続けています。

季節は秋、
近くの桜は赤や黄色などが眩しい紅葉で道は紅葉のじゅうたんになります。
ここにはすすきが垂れ下がり夕焼けのように赤い赤トンボが飛びます。
他のところではブドウや栗のように実るものはあります、稲もそろそろいい具合になった時に刈り入れが入ります。
虫たちがまだ寛いでる最中だった。　驚かせちゃってごめんね。

季節は冬、

近くの桜は次の花を咲かせる為に枝の状態で身を縮めている。
ここには特になにも、

・・・いや、ひとつだけありました。
雪の中で踞って寒さをしのいでいるふきのとうがいます。
近くにはたまにうさぎが跳ねることもあります。　今年はあまり見かけませんでしたが。

こうしてまた春が訪れます。
ここの畑は、一年でこういったそれぞれ違った顔を見せるのです。

恐竜たちの本音

『恐竜』

我々人類が誕生する前から地球に生息していた動物である。
体は大きく、爪や歯は鋭く、人間たちが使う戦車や大砲のような兵器をも通さない体は、地球上にいる中ではおそらく最強の存在である。

しかし、突如起きた謎の隕石衝突による氷河現象により、恐竜は凍結し、ある者は地下深くまで落ち、ある者は海底まで沈み、ある者は大岩や山のように地上にある土の一部になり、生存を確認された者はまだ一つとしてない。
今回はそういった恐竜が、もしも嵐を予知していたとしたら、

氷河期に入る前の恐竜の内面に迫ってみた。

「おらおらおら！　ロードランナー（おそらく族の名称）のお通りだー！！」
「あぶなっ！」
素早く走って来る中ぐらいの恐竜を避ける小動物
「も～、なんであんな奴らが幅利かせてんのよ。」
「・・・ほんと。」

「今日の空も絶好調！　いい気候だねー。」
「地上にいたらいろんな動物に狙われるかもね。」

「突っ走るってのは気持ちがいいよなー！」
「そうっすね。」

「みんなー　大変だよ～！」
暴走野郎たちに素早く横切る鳥が一匹
「不吉な予言が出たよ～！
あと少しの間で空から“いんせき”という大きな岩がこのあたりに落ちて来るって～！」
「その“いんせき”ってのがしょうとつしたら、このばしょどうなるの？」
「おそらく、そこから地割れが起きて俺たちは地面に巻き込まれるかもしれない。」
「ということはどうすればいいの。　僕たち助からないの？」

「おいらたちは空飛んでるから大丈夫だろう。」
「でも、その“いんせき”がもしけた違いに大きかったら、私たち激突よ。」
「あっ、それもそうか。」

急いで遠くまで走り出す暴走野郎たち
「なんすかアニキ、急に走り出したりなんかして。」
「その“いんせき”ってのが落ちて来んだろ！？　だったら落ちて来ない遠くまで逃げちまえば問題ないだろ。」
「さすがにいちゃんさえるね。」

「せめて、地上がなくなる前に、ここの木の実だけでも食べておきたい・・・！
でも首があがらない。」
「それっ、」ブチッ
「やったー・・・、　でも思った以上に固かった」バタッ

「どうせ“いんせき”が落ちて来るんだったら、最後くらいはいい思いしないとね。」
「うん、おいらたちとてもいいことした」

それから、隕石が落ちて来たのは一瞬の出来事だった。
大きな隕石は火山の中に入り、その衝撃で黒い灰が大量に吹き出し、灰は空一面に広がった。
やがて日が照らなくなった地上は一気に氷点下を向かえ、地上に存在する動植物たちは一気に凍りついた。

それに伴い恐竜は絶滅してしまった・・・

ホントの自分

「（みんなは知らない・・・・・・、

本当の自分というものを。）」

ボクがこの力を見いだしたのは小学校のころだった。
いろんなところへ行くと、まるでみんな小学生ではない。　子ども染みた人はその歳より小さい　または赤ちゃんのようで、大人しい人や一歩譲る人は大人のように見える。
それが少し続くとまた元の小学生に戻る。　こんな体験をしているのは、おそらくボク一人だ。
見たいと思って見れるわけではない、何かの拍子にこういうふうに見える。　自分ではどうすることだってできない。

この前だって、
いつも大変そうな表情をしたおじさんを見てると、高価な装飾品をたくさんしたお金持ちな人みたいに見えたり、
さえない感じのお兄さんを見てると、女の人と一緒に楽しそうに歩く姿が見えたり、
グレてる感じのお兄さんを見てると、
「　母さん、俺大人になったら人の命を助ける人になるんだ。　」

そこにはいろんな人の気持ちが伺える。
欲望なのか、こうであってほしいのか、でも現実のあまりの厳しさに諦めすら感じている状態なのか、傍からでは何とも言えない。

仕事をしている人にも当てはまる。
普通に働く人もいればその職業の一線でやっている人もまた別の働き方をする。
本当はこういった仕事をやりたかったのか、それとも自分の才能を見いだせていないのか、それは直接本人たちに聞いてみないとわからない。

学生の頃先生から余談で聞いたことがある。
「だいたいの人は自分の才能を見出だせないまま生涯を終える。」
それが罪というわけではないが、みんなは惜しいことをしている。

ちなみにこの力の欠点は自身、つまりボクの本当の姿は見えない。
だがおそれはしない。
ボクにはボクのできることを、真剣にやるだけだから。

一時の幸運

むかしむかし、山奥で暮らす男がいた。

「お、こんなところに兎が倒れちょる。　他の動物にやられたんかのう？」

「・・・まだきれいな状態じゃ。　まあ、もったいないからもらっとこう。」

「次の実りに備えて、しっかりやらんとな。」

「？　なんか光っちょるぞ。

・・・・・銭じゃ、しかもかなり値打ちのある。　わし以外にここを通る者なんておるのか？」

「今日はなんか変じゃのう。」

（上から何かが落ちてくる）

「なんじゃ？

蜂じゃ。　しかも死んどる。」

（上を見上げると蜂の巣がある）

「これは大きいのう、たくさんの蜂蜜がありそうじゃ。

中はまだ留守みたいじゃ、少しぐらい取っても怒られんじゃろ。」

「いつも通っとるのにこの木はこんな実をつけるんか。　しかも甘いわ。」

「運よく魚が川岸に上がって来よった。」

「これからもこんなことがあったらええのう・・・・・」

彼知らず、このような幸運は二度と来ないことを。
そう、こういった都合のいいことを過信しすぎた報いである。
いいことが続いたとしても決して安易に考えるべからず。

美しいもの　醜いもの

この世のほとんどのものは2つの対を成すものから成り立っている。

光と影、　上と下、　天才と愚か者

そしてこれもその中のひとつである。

「私は美しい花。
野原にたくさん咲いていて、蝶々や蜂がたくさん群がります。
見た目もとても綺麗で男の人が好きな女の人にプレゼントすると縁起がいいとも言われます。」

「私は醜い花。
崖の間に咲いていて、虫なども手をつけません。　見た目も“毒々しい”と言われ、人が私を握ったらおそらく手がかぶれます。」

「僕は美しい鳥。
華麗に宙を舞うとそれを見ていた人々は歓声をあげます。　また僕が歌声を披露するとそれに拍手をする人もいます。」

「僕は醜い鳥。
空を舞っているだけで人々に気嫌いにされ、場合によっては石を投げつけられたりされます。　また僕が声を出すとある人は恐がったりある人は耳を塞ぎまたある人はうるさいと怒鳴ります。」

「私は美しい木。
とても若々しく新緑が眩しく輝き、その近くで寝そべったりする人もいます。」

「私は醜い木。
かれこれ５００年近く生きています。　大木だったら皆さんびっくりだと思いますが、見ての通りひょろひょろです。　それに近くにも大きな木がたくさんあってその森の中では私はその一本にしかすぎません。　なので皆さんも気づくはずがないでしょう。」

「私は美しいマネキン。
どんな服でも着こなして、その服を気に入って購入する婦人の方も多いです。」

「私は醜いマネキン。
ずっと倉庫の中でほったらかしにされて店にも飾られないので何も着せて貰えません。」

「僕は美しいお皿。
国宝級くらいはありそうな大きなお城に飾られまわりにはたくさん警備のみんなが並んでいる。　正直、なんか落ち着かない。」

「俺は醜いお皿。
ちょっと欠けてるだけなのにリサイクルショップに置かれている。
人間という奴はちょっと価値が違うだけで扱い方が雑になってくる。　割れて断片になった仲間のやつはタイルアートとかなんたらで持て囃されてはいるものの、お前ら本来の目的を忘れているんじ

ゃないのか？」

まるで、天と地ほどの差があるものばかり。

ただし、すべて人間ではないのでそれぞれがどんな生き方をしていようが結局は自分たちには無関係だ。

しかしこれでみんなもどちら側がいいと思うか、一度考えてみよう。

行列いろいろ

「ねえ、なんでこれ並んでるの？」
「さあ、前々が並んでるから私も並んでるだけなんだけど。」
「じゃあ私も気になるから並んじゃお。」

土に並んでいて行列の到達点にお菓子がある。

「ほらさっさと運べ！　いいか、ちょっとならなんて安易な考えでつまみ食いなんかするなよ！　そんなことしたら生まれた赤ん坊どものエサにされるぞ。　若い奴らはわりと大食漢だからな。」

「ねえ、なんでこれ並んでるの？」
「さあ、前々が並んでるから私も並んでるだけなんだけど。」
「じゃあ私も気になるから並んじゃお。」

海の底で一列になって行進している。　それを上から見る者達。

「ちくしょう！」
「あれだけ大きいと、俺達も近寄れないな・・・・・・」

「ねえ、なんでこれ並んでるの？」
「さあ、前々が並んでるから私も並んでるだけなんだけど。」
「じゃあ私も気になるから並んじゃお。」

列の先は古い木製の住居。

「だからさあ、確かに盗んでいたことは謝るけど、他は全部オイラのものだよ。」
「うるせえ！　つべこべ言わずに寄越しやがれ！」
「お前以外の奴らもいためつけるぞコラ。」

「ねえ、なんでこれ並んでるの？」
「さあ、前々が並んでるから私も並んでるだけなんだけど。」
「じゃあ私も気になるから並んじゃお。」

白い門と黒い門の間に立って人を裁いている男。

「お前は人を殺したうえに自ら命を絶ったのか、キツい説教を受けて来い！

まったく、最近の人間は行いが悪すぎる。」

表も裏もない世界

全ての場所が日に照らされ、日陰になったところがまったくない。
その場所を歩くスーツ姿の男が一人。

男は歩いている群衆の声を聞く。
「あー、これからどうしよう。」
「とりあえず図書館で涼もうかな?」
「なんかハンバーガー食いたい気分。」
「そういえばあいつにまだ金返してないな。」
「久々にカラオケにでも行こうかな。」

次に男は喫茶店の中に入る。
酒を飲んでいる男二人。
「俺の女がいっこもやらせてくれないんだ。」
「そうか、俺なんかいつもいつも抱いてくれって言われて、俺ももうすぐ限界だよ。」
「結局女なんてさあ・・・。」
「加減知らないっ　つか、俺たちのことなんかいっこも考えてねえよなあ。」

男が出ていくときにもう一言聞こえる。
「それに金をくれって、結局はそっちかよ・・・・・」

道を歩いていると不自由な人を親切にしている人を見掛ける。
「どうもすいません。」
「いえいえ。」

男はじっと見る。

「本当はこんな奴どうだっていいんだが、死んだ後に地獄にも行きたくないし、天国に行くための一つと考えれば。」

隙間でやさぐれながら歩く猫が二匹。
「?あいつばっかり手柄だってよう！?」
「?元はといやあ俺たちのお陰なのにな。?」
「?ボスはいっこも見てないし。?」
「?それにあいつばかり気に入れられてるから、逆らうこともできねえ。?」
「?ぞくに言う虎の威を借る狐だな。?」
「?そうだ、猫の皮被った。　いや、おまけにあいつ何もやんねえからタヌキ野郎だ。?」

「?おーいお前ら。?」
「?！?」　「?！?」
大きそうな猫が二匹の前に来る。
「?こんなところでなにやってる??」
「?いや、特になにもしてませんよ。?」
「?さっきタヌキ・・・なんたらって声が聞こえたような気がするが。?」
「?さあ、なんのことでしょうか。?」
「?ボスの近くにタヌキみたいな奴がいますねって。?」
「?ばかっ！?　」

これらの会話は、心の中で思っているのではなく、どれも自然と声に出しているものである。
ゆえに隠すことなんて一切できない。
ここはそんな世界である。

環境大逆転

「はあ～、暑い暑い！」

いま我々がどこにいるのか皆さんはわかるだろうか？

突然謎の異常気象が起こり、北極や南極はまるで砂漠のような暑さと化していた。　私達はその原因を突き止めるために北極圏で調査を開始した。

「どこまで歩いても砂漠ですよ隊長！」

「ああ、だがここでへこたれるわけにもいかんぞ。」

「ていうか、北極にも陸地ってあったんですね。」

ちなみに気象庁の極秘に送られてきた情報によると、砂漠地帯や亜熱帯地域などが今度は激しい極寒に見舞われたらしい。　現地の人々も初めての事柄で誰もが外出できないでいる。　今まで窓ガラスもなしで風が通るのが丁度よい環境だった家庭もさぞ往生していることだろう。

私もどうにかしたいところではあるが、相手は政府だしそんな個人的な意見が通るわけがない。　現地のみんながなんとかしてくれるのを祈るしか・・・

「見えた！」

「海だ。　だけど、氷すらはってない。」

「ペンギンもホッキョクグマも見ませんね。」

「すごい・・・、ぬるま湯に近いほど水が温かくなってる。」

私達が推測するに、北極に住む動物はおそらくこの環境では住むことが不可能だ。　なので彼らは海を渡って寒い地域に移動したと考えられる。

「ん？　寒い地域？」

ホッキョクグマがもし民家のある地域の方へ来たら人々が危ない・・・！

だが、どうすることもできない。

「南極圏の調査団から通信が入りました。」

「なんだ？」

「南極は日が昇らない極夜状態で、寒いらしいのですがそれでも氷ははっていないそうです。」

「・・・そうか。」

「僕達はどうします？」

「行くしかないだろ。」

「隊長　雨ですよ！」

「しかも、熱湯のように熱いです。」

「い、一旦非難だ！　どこか雨避けになるところまで急げ！」

こうなってしまった原因の一つに温暖化が挙げられる説もある。

しかし、私達ではどうすることもできない。

どのみち今は北極の調査をするしかないのだ。

きれない刀

腰に刀を刺したいぶし銀な侍の男が歩く
「（ワシの刀は・・・・・）」

百姓の男が悪い奴らに絡まれている
侍はその男を刀で斬る　男はびっくりして膝をつく
「おっ、なんともない。　脅かしおってこいつ！！」
悪い奴らは今度侍を標的にして追い掛ける
「待たんか！」
「（絶対にきれんのじゃ。）」

「まったくあんたって子は！　何度言わせたら気がすむの！」
家の門の前で母親にガミガミ怒られる子どもがいる。　子どもはしょんぼりな顔と半分うっとうしい感じで聞いている。
侍は通りかかると、母親に刀でわからないように居合いぎりをして通り過ぎる。
「わかったら今度はしないのよ。」
「はい。」

二人の仲むつまじい男女が互いに長い席の端に座る。
「（春とは、長いこと付き合うとったが、どうやって別れを切り出そうか・・・）」
そこに侍が通りかかる。
「なあ春、俺ら・・・・・・」
侍が男に刀で素早く斬って通り過ぎる。
「俺ら・・・・・・、　もう一度やり直さんかのう。」
「・・・・・・は、はい。」

町の中を侍が歩いていると慌てた顔をした男が走って来る。
「誰かそいつを捕まえてくれー！　売りもんの魚をかっぱらったんじゃ！」
男の先には魚をくわえた猫が走って来る。　猫とすれ違いそうになったときに侍はくわえている魚を斬る。
「ニャー！」
猫は魚を離して走って行く。
「あいつ急に魚を手離して逃げおった。」
男は魚を手に取る。
「いつの間にかまるで石のように固い。　これじゃあ噛みきれんのう。」

「ちょっとひと休みさせてほしいんじゃ。」
侍はとある家に来てひと休みをする。　中の廊下を歩いていると机の前で困った顔をする亭主らしき男。
「報告を書けってゆわれても、いったい何を書けばええんかのう・・・・・・」
男は手に筆を持って紙に書こうとするが息詰まっている。
男は玄関に戻って刀を持つとその男を刃先でこつく。
「・・・そういえばあんなことがあったな。　あ　こういうこともあった。　おおすごい！　手が止まらん！」
男の手は早く動き、紙に書ききれなくなると今度は床や壁や天井に書くようになる。

侍が民家を出て夕方近くになる。　歩いていると待ちぼうけする娘。
「もうどれだけ時が経ったのでしょう？」
その娘を歩きながら刀で斬ると侍は通り過ぎる。
「ああ、女子（おなご）を待たせるとはどういうことですか！　いい加減にしてくださ～い・・・・・・！」

暴走状態になると走り去る。

侍が町を抜けて道を行く。
「いたぞー！　あいつだー！」
侍のまわりに複数の刀を持った男達が来る。
「皆の者〜！　俺はあの男にやられたがじゃ！」
男達が侍に襲って来ると侍は刀で斬る。
斬られた男達は斬られた箇所を手で触る。
「？」
「なんともないのう。」

「きりがない・・・・・・！」
再び男達が襲って来ると刀で斬りながら侍は他の方向へ逃げる。
斬られた男達も何ともないことを確認すると侍を追いかけていく。

「（この刀は絶対にきれん。　ゆえにワシにはこいつの価値が、分からんがじゃ。）」

関西スパーク

ここは、大阪の都心　ほぼ片隅にある電気街

その名も『　でんでんタウン　』

そこは、あらゆる家電製品からアニメ、ゲームの専門店が有数に存在する。

しかし、今の世間は不況の波に煽られている。
それはもちろん、この電気街も例外ではない。

そんな不況な世の中から街を陰で支える7人の若者がいた。

「毎度あり～。」
とあるゲーム等の小売り店で物を売りながら店の片隅で遊ぶ青年。
携帯ゲーム機で遊んでいる。
「新しい武器売ってないかなー。」

厨二病なオタク　和浩

「店の装飾、こんな風にお願い。」
「あ、はーい。」

デスクに向かって座る青年、
そのまわりからは禍々しいオーラ
「うわっ！」
「すごいオーラだ！」
「やめろ誠司、絵描くだけだぞ。」

ここぞというとき鬼才の画家　誠司

とある限られたスペースにいる高校生くらいの青年
パソコンの掲示板には“隊長、そちらのご様子は？”と書かれてある。
それに少年は“本日も異常なし。　洗濯日和なり。”と返す。

ネットカフェの番人　満登

メイド喫茶、
「ご注文は何になさいますか？」
「じゃあ、かよちゃんがいいな。」　ぶひぶひ・・・
「おにいちゃん。　ちゃんとメニュー覧を読んでね。」

都会に慣れようと奮闘中　夏世

ケータイのショップ、
「ありがとうございます。」
「はい、どうも。」
お店からおばあちゃんが出て商品を持っている。
「最近のやつは、お年寄りにほんとやさしくないよな。」　いろん

な機能つけちまって

京都大学在中　謙吾

電気街から少し外れた和風な建物
その店先近くを掃除する和服姿の男
「周りの迷惑かけないようにしろよ。」
「ウッス。」
店の出入り口近くに水を撒く

メンバーの中ではゆるキャラ　根来

博打屋、
お椀にさいころを入れて目の前に置く
客の中の男は脇腹を掻くふりして隣の男のポケットから券を盗む
女性もそれに気付く
「（あいつ、ネコババしたな・・・）」
その男は丁の札を出していて茶碗を開けると5と2の目が出る
「うへぁ～　また負けた～！」
負けて悔しがる男を見ながら女性は思う
「（こいつから巻き上げて、盗まれた分は持ち主にこっそり返そう。）」

実はいい子な姉御　七瀬

接点が全く見えなさそうな彼らはライバル同士で、なにげに腐れ縁で、しかしあまりみんなに知られていないところで、日々奮闘を続けているのである。

季節外れの蝉

僕はただ、ずっと待っていた。

2年間も土の中で我慢して、ようやく地上にやって来た。
木の中に隠れて最後の成長に入る。
そしてついに、　僕には立派な羽が生え、声まで出せるようになった。

大人になった僕の寿命は1週間。
だからその内におもいっきり鳴こう。

しかしそこには、友達も仲間の姿もない。
まわりの木々には、見たこともないほどの赤みが色づいている。

その時僕は思った。
成長するのが遅すぎた・・・・・

でもせっかくここまで育ったんだ。
おもいっきり鳴かなきゃ意味がない。

（（（（♪））））

「・・・・・・、　うるさい！」

さすがに夏の風物詩とだけ言われる僕のような声は、もうこの時期になると何の役にも立たない。
僕はこのまま何もやらずに一生を終えるのか。
そんなことを考えていた時だった。

「はぁ・・・、　はぁ・・・　」

山奥の畑でおじいさんが一人、鍬で耕しながら寒そうにしている。

（（（（　♪　））））

僕の声は夏の風物詩。
そんな彼の少しでも助けになれば。

「お、蝉が鳴いとるな。」

街の中では厄介者な僕は、こんな自然にあふれた村でならもうしばらくはやっていけそうだ。

「なあ　おばあさん。　畑を耕していると、蝉の声を聞いたんじゃ。」
「え？　でももう秋ですよ。」
「そうじゃな。　でもあの声を聞いていると、寒くなるのはもうちょっと先になるような気がしてな。」

それから数日が経ち、僕はもう動かなくなった。　でも後悔はしない。
これでやっと、僕もみんなと一緒だ。

課題オークション（前書き）

注意：この作品はあくまでフィクションです。
　作者が空想的に書いた世界観であり、実際の団体を批判しているものではありません。

課題オークション

ここは、あるオークション会場。

しかし何かが違う。

「はい落札！　ではフィンランドでは兵器の開発を３つまでという課題が課せられました！」

今行われているのは名付けて“課題オークション”

各国の首相が集まり、その国自身の課題について取り組ませるものである。

課題にはクリアするとある程度の報酬がもらえるが、課題の難易度が高くなるにつれてその報酬もはね上がる。

「えー、次の課題はこれだ！」

「“自身の国にいる難民の人口を減らす”！

ではまずは５００万人から！」

「４００万人！」

「３８０万人！」

「３００万人！」

「２２０万人！」

「１０万人！」

「１０万人、１０万人が出ました！　さあ、他には！？　　さあ！

他には！？

はい決まりました！　フランスでは難民の人口を１０万人にまで減らすことが課せられます！」

「次は、“森林の面積を増やす”！　では２０ｈａからスタート！」

そして落札される

「はい決まりました！　アフリカでは森林を５４６万ｈａ増やすことが課せられます！」

「　　ではガソリンを燃料にする車を3年後にほとんどなくすことが課せられます！」

「　　では5年間同じ政府であることが課せられます！」

「　　では国が抱えている借金を５０００万円まで下げることが課せられます！」

ちなみにこの内容は世界的にも放送され、国民のほぼ大半は見ている。　ゆえに大見得を張りすぎた国の政府は大ほら吹きとまで激しく批判されてしまうほどである。

そこにいる者達は、国民の不信感を煽られないようにする以外ほかに方法がないのである。

真琴くんは両性類

オレの名は由川真琴。　地方の産業系の大学に通う１９歳。
どう見ても健全な男子である。

実はオレには人に言えない悩みがあるんだ。

あれは小学校低学年の頃だった。

駄菓子屋に行って男子の友人とお菓子を食べている　その時何かが起こる

「あれ？　さっきまで真琴いたよな。」
「どこ行ったんだろう？」
「なに言ってんだよ、オレはここにいるよ。」　（トーンの高い声で）
「こんな子いたっけ？」
「お前どう見ても女だろ。」
「は？」

不思議に思って胸や股に手を当てる

「うわーーーーーーーーーーん！！」
「あ～あ泣かしちゃった。」
「えっ！？　俺のせい！？」

その時はかなりパニックだった。
一生女のままでいないといけないのかと思っていた。
その後　姉ちゃんに引き取られてなんだかんだで元には戻れたけど、
その時の恐怖感はすごかった。

長い経験からある程度知ったことは、甘いもののような子ども向けの味覚のものを味わうと女になり、
コーヒーのような苦いものなど一般に大人の味と言われるようなものを味わうと男に戻るらしい。

ちなみに医者には見せたことがない。　どうせ信じてもらえないから。
別に病気ってわけでもないし。
オレはそんな特異体質だ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1164m/

斉藤ノブヒロ　短編集

2011年12月25日00時53分発行